

〔書評〕

## 大石征勝著『希望の光を一にして——国語科教育への願いをこめて——』

中西健治

本書は報告集の形式に身を隠した恐るべき国語教育実践の報告書であると同時に研究書でもある。著者大石征勝氏は長年に亘る高校教育現場での実践を背負って立命館大学の国語科教育の授業に乗り込んで来られた。そこで展開された学生との真剣勝負の様子を準備段階から閉式までを含めてきわめて冷静に諄々と説き示されているのが本書の依って立つ基礎を成しており、それがために読後感は一種の爽快感さえ伴う。巷間この種の教育実践報告は

多く、それらに就いて学ぶべきことの多いことは二十年間の高校教員生活を経験した評者自身も十分知っている。しかしその内実は学習者の単なる感想や思いつき作文の引用で水ぶくれした報告集であることも多く、論考と云うにはあまりに恥ずかしいものも、これまた多いのである。生徒の引用文の背後に実践者が昼寝をしているような類、いわば「顔の見えない」報告が近年多いように思える。対するに本書はそれら数多の論考をまったく寄せ付け得ない内容と魅力に溢れていると、後輩としての身びいきを差し引いたとしても、断言できると判断した。その考えは次第に確固た

るものとなり、本誌を借りて述べたいという誘惑黙し難く、評する者としての資質の欠如とそれに伴う羞恥心、さらには大石氏自身身の掣肘をも振り払って執筆した次第である。

○

本書の構成は「まえがき」と「あとがき」の間に、A「国語教室からのメッセージ——『国語科教育概論Ⅰ』の生成と展開——」、B「『国語科教育概論Ⅰ』全十五講テキスト緒言——」、C「国語教室への道のり——『国語科授業研究Ⅰ』の生成と実践——」、D「『国語科授業研究Ⅰ』教材原文集緒言——」、E「教科書の森に分け入る——『国語科教材研究ⅡⅠ』の生成と受容——」、F「人生に深入りする教材——『国語科教材研究ⅠⅡ』の生成と受容——」の六章がある（A～Fは評者による）。標題からして極めて著者の真剣さが伺われるというものだ。「国語科教育概論——『国語科授業研究』——」といい、「国語科教材研究」という、その守備範囲をややもすれば見失いがちな評者などからすれば、この三者を画然と仕分け、それぞれの副題に「生成と展開」「生成と実践」

大石征勝著『希望の光を一にして——国語科教育への願いをこめて——』

「生成と受容」を付し、その観点からの総括を記録されているのである。著者にとつての「生成」とは、授業を担当するにあつての方法や構想をさして、「展開」「実践」「受容」は受講生の声をも収め、授業全体を立体的に把握できるように工夫されていると思われる。いま立体的と言つたのは、例えばAで全十五回の配列が「一定のすじみちがつけてあり」「一種の Rond 形式になるように意図」してあること、Cでは前半の教材演習として

「ことば・文芸と人間・文明と社会」の三分類から著者自身が適切な教材として発掘した二十二編が示され、後半が授業演習として十七例のスピーチの教材例があげられ、全十五回の授業の全貌が把握できるようになっていること、そしてA、Cの次に置かれたB、Dにはそれぞれの教材に対する著者の緒言があり、E・Fにも同様に、編成、緒言、感想という形式をとっていること、というように本書が整然たる配列のもとに仕組まれているからである。さらに言えば、A「メッセージ」、C「道のり」、E「森に分け入る」、F「深入りする」という言葉が次第に進化するように配置されていることも著者の思案の妙であろう。

○ 評者がかつとも関心を抱いたのはB、D、E、Fの収められている数々の「緒言」である。教材をどのような意図で選んだかを明らかにすることは教師としての全身をさらけ出すことであると同時に、生徒への希望、期待を吐露することでもあらうし、受講生にとつては大きな課題となるはずである。毎回の講義の課題と

著者のコメントが要領よく記されている。Bの「緒言」にはひとり教室のなかに留まらない問題提起もなされたり、「人のふんどしで相撲をとる」ことの意義が説かれていたり、E、Fのそれには著者の深い考察が躍動感を伴つて語られてもいる。教材への関心を深め、発展的な学習を促しうるように工夫されているのである。かくも国語科教員の教材研究への課題は大きいものか、実感させられるのである。

○ 著者は受講生に「現代文をしつかり扱うことのできる教員をめざしてほしいと願う」と言い、「文章を読み解くのに、あらゆる文章に有効な万能の方法などありえない。個々の文章の書かれ方のなかに、その読解の手がかりは潜んでいるのである。」と教材文との真摯な対決の末の読解を強調されている。さらに続いて、「現代文を担当する教員の欠かすことのできない仕事として、自主教材の発掘ということがありと確信している」と言い切つておられる。現今もベテラン教員にとつては古文・漢文を容易とする傾向があるのか、評者なども駆け出しの高校教員時代はなかなか古文・漢文は持たせてもらえず、十年あまりはほとんど現代文担当であった。振り返つて見るに、その時期に悪戦苦闘したおかげで幅広い視野と方法を勉強し得たように思う。将来、国語科教員を目指す方は、ぜひとも著者の言に従つて自身の目で新しい教材を見据える力を養つて欲しいと切に願うものであり、また、自主教材の発掘を心がけて欲しいとも思う。そのような「発掘」行為

を著者は「山師」の仕事に通うと言う。「世の中にあふれる膨大な量の著書・作品集・新聞・雑誌などのなかから生徒に読んでもらいたいと思う原文を探しだし、そこから生徒の内面的成長の糧になり、あるいは、その自己変革の契機となりうる提言や認識をとりだし、より効果的に供するための工夫を加える」という「山師」こそ、大いに歓迎すべきことではないか。「人のふんどしで・・」とか「山師」という卑近な譬喩を用いて語りかける著者の巧みな言説に脱帽するのである。

○ すべて教育活動の困難課題の一は評価を次の実践にどう活かすかということである。本書には受講生の「感想と意見」が掲載されている。著者の心構えとしての「緒言」に対応しての評価に相当するものであるからこそ、例えばFの十五回の講義中、吉野弘や茨木のり子、石垣りん、三浦哲朗などの教材に対する受講生の「感想と意見」は何としても知りたいものであった。(もつとも「あとがき」によれば、この感想を含め、配付資料や学生アンケート集計結果を含めた一切が図書館と教職課程教室には保管されている由。残念と言わざるをえない。)教材として評価の高いこれらの作品を受講生がどう受け止め、これをいかに発展的に捉えようとしているかは、国語科教員でなくとも関心を抱くはずである。その点でこれらを省かれていることはまことに残念という他ない。おそらく著者の手元には膨大な資料があることだろう。願わくばこれだけを切り出して後日、纏めていただきたいと願う者

でもある。

○ もう一つ。本書巻末には「総合索引(事項・人名・書名)」が付されている。凡百の報告書類と一線を画する根拠としてこの点も加えていい。索引を作るという作業は、単なる語句の再確認ではなく、著者が自身の文章に責任と自信をもち読者に訴える指標を示す証を列挙することに他ならない。評者も恩師から索引の無い著書は作るなと度々厳しく教えられたことであった。国語科教員をめざす者、あるいは現に教職にある者がこの索引をもとに自分の課題をぶつける一つの手掛かりを与えられるはずである。その指標である「総合索引」はきわめて有効な働きをしよう。この形式をとる以上、願わくば私家版たるを止めて、市販の書籍として脱皮していただきたいと願っている。

○ 立命館大学寮歌一番、「夕月淡く梨花白く 春宵花の香をこめて 都塵治まる一時や 眉若き子等相集い 希望の光を一にして 厚き四年を契りたり 厚き四年を契りたり」——著者は、学生時代に愛唱した寮歌の一節を書名として採っておられる。この所為をして彼をロマンティストと言わずに何と言おう。近年、校歌はもちろん、応援歌すら歌えない学生が多い中で、夢多かりし青春時代に親しんだ寮歌を書名に冠するという営為の背後に脈々と流れる「赤き血汐」(校歌の一節)が著者の今日を支えていたことを鮮明に示しているのであった。昨今の次第に息苦しくなる教育現

場に活路を見出しつつ高校教壇で語り続け、その返す刀で後輩諸君に熟をもつて訴え、記録する著者の姿、それ自体こそまさに活きた国語科教育実践であるように思うのである。本書の「まえがき」に「幽明の境をこえての遠藤庄治氏への報告書である」と宣言される本書から、教育の根幹に人間の豊饒な繋がりのあることをも思い知らされたのであった。

(著者・大石征勝<sup>おおいしよしかつ</sup> 一九四五年兵庫県生まれ。本学文学部非常勤講師。本書は二〇〇七年三月刊 非売品)

(なかにし・けんじ 本学教授)